活動報告

夏季講座「モノを切り口とした世界史」

大清水高校　堀部宏人

世界史研究推進委員会では三年前から世界史に興味・関心のある生徒を対象に公開講座を開催している。今年の概要は次のとおり。

☆8月23日（月）　会場・柏陽高校

①「見る…絵画・彫刻・建築などを切り口にした歴史」（柏陽高校の先生方による共同授業の試み…松木謙一・木村芳幸・原範子）

ロセッティー（英一八二八～八三）が描いた「愛の杯」という作品の図像学的解説を通じて、受講生たちは画家が悩みからの救いと聖杯を持つ聖母マリアの姿を、当時の生身のモデルで象徴的に描くことによって、機械文明と大量生産方式を批判し、ハンド・クラフトの重要性を訴えているんだということをよく理解したようである。

また、アーチのキーストーンから建築物に迫ったり、聖杯を巡るテーマから「モノをみるとその時代の人の気持ちがわかる」というコンセプトは受講生にしっかり伝わった。なお、翌日の栄光学園で、実際のミサに使われている聖杯を見せていただいた。

☆8月24日（火）　会場・栄光学園

②「暦から見た歴史」　講師：大島弘尚（栄光学園）

「世界史への扉」によく取り上げられているテーマである暦は、誰が何のために定めたのか把握することが重要。日本でも七曜制は10世紀（『御堂関白記』）から確認できるということが驚き。

③「銀から見る世界史」　講師：古川寛紀（上郷高校）

世界規模の交易が始まった16世紀に、東南アジア産の香料・香辛料や中国産の陶磁器・絹は世界中に広がり、墨銀や和銀は交易の代金として、中国に流れ込んだ。しかしその先は北方民族対策で消えてゆく…こうしたダイナミックな動きを眺めた。

☆8月25日（水）　会場：外短付属高校

④「陶磁器の歴史」　講師：岡田　健（新栄高校）

陶磁器を提示しながら、土器、陶器と磁器の違いに触れた後、元末からの染付は、イスラーム商人がプロデュースして宋の青磁・白磁とペルシアの染料を合体させたものであることや鄭成功の活動など明清交替期の混乱を背景に、日本に赤絵の技術が伝わり、伊万里焼が盛んに海外輸出されたことなどについて、広い視野からわかりやすく説明があった。やはり実物を手にすると印象が深まり、学習効果が高まるものだと改めて実感した。

⑤「香木、香辛料の歴史」　講師：石橋　功（外短付属）

この授業では、前半に沈香（伽羅）後半は乳香のにおいを教室に漂わせて、より深く生徒の意識への浸透を図った。香料や香辛料の原産地を確認するだけでなく、歴史的意味を確認し、近代世界システムの展開を踏まえて、17世紀からの人気商品コーヒー・紅茶なども取り上げた。そして、これらの商品はステータス・シンボルとして扱われていたことがポイントであると強調されていた。

最後に、この企画のねらいは、受験対応の細かな知識を効果的に教えるための研究授業をすることではなく、身近なネタを利用してある時代・地域の感覚をいかに持たせるかということであった。講師の先生方に改めて感謝するとともに、来年度も多くの講師・テーマを公募する形で発展・継続させていきたい。

夏季集中講座「イスラム史」

○授業内容「イスラム史」

授業対象　八月二六日～八月三一日　外語短大付属高校三年生

目　　的　イスラームと周辺地域の関係を構造的に解説、受験に対応させる。

○二六日⑥「イスラムの広がり」　小林克則（厚木商業高校）

参加生徒四五名　参加教員一五名

受験の世界史はかくあるべきという、湘南高校で一二年教鞭をとられた先生の授業であった。「人間は弱い存在、特に男は…」とちょっと脱線して笑いをとる。またその脱線を適当に切り上げるテクニックは大いに参考になるものであった。生徒の意見に「大変疲れたというのが今の状態でなにも考えられなかったが二時間でこれほどの内容をやれることに感動しました」とあったが教員の意見も同様であった。時間が少し足らず駆け足となった。

○二七日⑦「近世のイスラム」　佐藤雅信（寒川高校）

参加生徒三七名　参加教員九名

小道具が生徒の授業関心を引くことに有用ということを見せた授業であった。授業間の休みに配られたナツメヤシ、トルコのケーキは生徒に好評であった。オスマン帝国の形成をトルコ史の原点にたち返りプリント七枚の授業は教員も知らない知識が多く、勉強になるものであった。受験生にとっては詳しすぎる内容ではあった。

○三〇日⑧「近代のイスラム」　杉山　登（逗子開成高校）

参加生徒三七名　参加教員九名

何のプリントも用意しないこの授業が意外と生徒に評判が良かった。「やっぱりプリントの穴埋めよりノートに書く方がおぼえると思います」という生徒の声が多く聞かれた。流れるようなイスラムの近代史の授業には白墨のみで、重要事項は自分で違いをつけなさい。という講師の指示どおりに生徒たちはマーカーを使っていた。午後の教員間の話し合いでは板書きかプリントかの熱っぽい議論が行われた。

○三一日「現代のイスラム」　小林克史（秦野南が丘高校）

参加生徒三七名　参加教員一〇名

中休み後のイスラムのいでたちでの登場は受講生に大きなインパクトを与えた。中東の現状の紹介は現地に赴いた人しか語れない内容を含んでおり生徒・教員の関心を集めた。現在の中東情勢を考えさせるという観点では生徒を引きつけるものであったが、受験を想定した生徒にはやや物足りなかったようだ。

（文責　大清水高校　堀部宏人　外語短大付属高校　石橋功）